

中国における經典目録の生成と入蔵録

大谷大学名誉教授

大内文雄

〔1〕「大正新脩大蔵経刊行趣旨」と「大正新脩大蔵経再刊の趣旨」

只今ご紹介いただきました大内と申します。私は中国の仏教史を研究対象として参りました。

最初に講題に言う經典目録について簡単に説明致します。經典目録は、中国を初めとする漢字文化圏での仏教の歴史を今に伝えてくれる重要な史料です。

我々が通常仏教史や、真宗学・仏教学を研究するには、全て基礎史資料として『大正新脩大蔵経』を使用すると思えます。洋装三段組の活版印刷で、印度中国撰述部だけで五十五巻あります。高楠順次郎、渡邊海旭というお二人によって刊行が発願されました。私の手元に改訂新版の『大正新脩大蔵経目録』がありますが、冒頭に、大正十二年（一九二三）の年次を記す、このお二人による「刊行趣旨」と、昭和三十五年（一九六〇）になりまして大正大蔵経が再刊された時の「再刊の趣旨」が載せられています。そこには「大正新脩大蔵経刊行趣旨」です。で、「大蔵経」が正式の名称でありますけれども、このお二人の「刊行趣旨」では「大正新脩一切経」とい

う表現もします。また「再刊の趣旨」でも「大藏経」「一切経」両者共に用いられ、どうやら「一切経」は普通名詞で「大藏経」の方が固有名詞であると思われる。

(2) 中国における典籍目録編纂・仏教経典目録前史

仏教が中国に伝来したのはほぼ紀元一世紀前後の後漢の初めころであつたろうと言われます。前漢・新・後漢という前後四百年くらい続いた時代の、ちょうど紀元前後頃を中心にして前漢と後漢に分かれますが、そのころ、まだ仏教が本格的に中国に入る前に、春秋戦国時代以来のいわゆる諸子百家といわれる思想家たちによる言説が、後世に著作物としてまとめられ、さらに歴史記録も大量に堆積し、後漢初期の頃には、それらを整理する必要があるので、中国仏教の歴史が本格的に始まるより前に、多種多様の書物を整理する必要に迫られて、前漢末から王莽の新しい王朝の時に画期的な劉向による『別録』が編纂され、その『別録』を基として劉向の子息の劉歆が『七略』という目録を作り、現存する中国の全ての書物が七部分類という形で整理されました。こうして中国のみならず、東アジア漢字文化圏において最初の典籍分類目録が現れました。ただし、最初の輯略は序文と総論に当たるものと思われ、二番目からが目録部分になり、順に六藝略以下、諸子、詩賦、兵書、数術、方技の六略に分けられ、書物の内容によって六つに分類されました。中国に仏教が伝来した、ちょうどその頃、既に中国にはこういうよく整備された分類目録が作られていたのです。次に後漢初期の頃、班固が編纂した『漢書』にも、藝文志という書籍目録が含まれ、六藝略から方技略までがそっくりそのまま残されているために、これによって劉向・劉歆による編纂の内容が分かります。『漢書』というのは前漢一代だけの断代史ですが、

『漢書』はまた前漢・司馬遷の『史記』に続く正史とされ、その藝文志は正史に収められる書籍目録としては最初の例となります。

このように前漢末から後漢の初めにおいて、中国では典籍の分類整理について既に確固たる基盤が築かれていました。インドから運ばれた仏教經典が漢訳され、時代を経るに従ってその数を増やして行けば、經典の内容や翻訳に際しての翻訳者や時代・場所、あるいはそれらが重複してくると整理の必要が出てきます。その時に整理の方法論が既に確立されていたということが、まず大事な点だと思えます。

次に目録上の仏教の記録となると、ずっと遅れて、北に胡族の国家が続く北朝（北魏、東魏・北齊、西魏・北周）、南に漢民族の国家の南朝が存続する南北朝時代に入り、南朝（宋・齊・梁・陳）の二つ目の王朝の南齊の時、王儉が經典志以下、諸子・文翰・軍書・陰陽・術藝・凶譜の七種に分類して『七志』という目録を作りました。文明の所産である思想や文学・技術全ての書物を七分し、そこに付録として、道、仏の順に道教經典と仏教經典のことがほんの少しですが、記されています。これが仏教經典が中国の目録に記された最初の例です。次いで南朝・梁の武帝・普通四年（五二三）に、阮孝緒が『七録』を作りました。これも七という数字を受け継いでいますが、中のありようが大きく変化し、全体を内篇と外篇に分け、内篇は經典録以下、紀伝・子兵・文集・術技の五録となっています。經典録は儒教で言う易・書・詩・礼・楽・春秋という六藝、六種の經典の他、孝経・論語・小学を含み、次の「紀伝録」は歴史記録です。この内篇に対し外篇として仏法録・仙道録が置かれました。ここでは仏教を先に道教が後に置かれていて、これは非常に大きな意味を持つと思います。仏教經典の漢訳が進み、中国固有の文章語による漢文文献としての数量が増し、仏法録に載せられるほどの数的規模が示され、同時に道教にもその影響が及んで道教經典とされるものがたくさん作られました。

次に、四部分類の方法が既に三国時代ぐらいから始まり、その後、西晋の初めに鄭默、荀勗じゆんきよくによって四部分類の『中經』けい『中經新簿』という目録が作られました。全ての中国の書物を四つに分類する、これが後に主流になっていきます。唐の魏徵が太宗の勅命を受ける形で編纂の代表者となった『隋書』は隋の一代だけを記録したものですけれども、『隋書』けい經籍志という書籍目録のところでは、後漢代から隋代に至るまでの書物を分類し通史として表現しています。その『隋書』けい經籍志が、經部、史部、子部、集部の四部分類に拠っています。儒教の經典がまず經部。そして次に、時代と共に歴史関係の書物の数が非常に増えてきましたので、それまでは諸子百家の子部が先で、次に歴史の史部が来る順序であったものを変えて、現状に合わせて史部・子部の順に改め、第四の集部の後に付録として道經、仏經の項が設けられ、道教・仏教の順に經典等の記録があります。唐代では則天武后の時代を除き、基本的に道先仏後の順です。

(3) 『大正新脩大藏經』卷五五・目錄部所収經典目錄

- 一 梁・僧祐(四四五～五一八)梁・武帝天監一七年歿)撰 『出三藏記集』一五卷
- 二 隋・法經等撰 『衆經目錄』七卷 隋・文帝 開皇一四年(五九四)
- 隋・費長房撰 『歷代三寶紀』一五卷(卷四九・史伝部一所収) 隋・文帝 開皇一七年(五九七)
- 三 隋・彦琮撰 『衆經目錄』五卷 隋・文帝 仁寿二年(六〇二)
- 四 唐・静泰撰 『衆經目錄』五卷 唐・高宗 龍朔三年(六六三)

- 五 唐・道宣撰『大唐内典録』一〇卷 唐・高宗 龍朔四年（六六四）
- 六 唐・靖邁撰『古今訳経図紀』四卷
- 七 武周・明佺等撰『大周刊定衆経目錄』一五卷 武周・天冊萬歲元年（六九五）
- 八 唐・智昇撰『開元釈教録』二〇卷 唐・玄宗 開元一八年（七三〇）
- 九 唐・圓照撰『貞元新定釈教目錄』三〇卷 唐・徳宗 貞元一六年（八〇〇）

インド文化圏所産の仏教經典が漢文という東アジア共通の文章語に翻訳され、漢文化された經典としてどのように記録され、整理されていったかは、現在では『大正新脩大藏經』目錄部に収載されている以上の經典目錄（以下、経録と略）に記録されています。一番から九番まで数字を振っており、これは目錄部に入っているものです。その他に、八番、九番は続編もあります。ところが丸印をつけた三番目の隋の費長房撰『歴代三寶紀』は、『大正大藏經』第四九卷の史伝部にあり、史伝部の第一巻に入っています。つまり『歴代三寶紀』は目錄ではなくて歴史記録とされています。この『歴代三寶紀』が今日の話の眼目の一つとなります。

このような一番から九番までの目錄によって何が行われたかと言いますと、まず經典の真偽判別です。もちろん經典の内容によつての分類は第一に大事なことですけれども、中国では漢訳された仏典は、すぐに真似られて、古くから疑偽經典と言われるものが多数生まれました。そして経録を作る人たちは、僧祐の『出三藏記集』のように個人的な念願を持って作った人もいますけれども、隋の法経以降の目錄は全て基本的に個人撰という形にはなっていますが、よくよく見ると全て皇帝の許可のもとに皇帝に提出されていますので、公的な色彩を持ったものと思つてよいものです。そこでは経・律・論のそれぞれに対し、内容による分類と整理がなされました。

私自身が関心を持っておりましては、こういった経録には正と負の両面があることです。正の面は、経・律・論とそれに続く賢聖集伝という賢人や聖人、釈尊の教説を自分の考えによって世に広めていった人々による著作がそれに当たります。特に經典の中でこれは大切なもの正しいもの、正しく釈尊の教えを受け継いでいるものだと証明する。しかし同時に、それに当たらないものは、疑わしいもの、あるいは偽物とされます。これらは再検討と糾弾の対象となり、疑經・偽經の目録が作られ、疑經は将来にわたって検討するよう要請されますが、偽物、「偽妄」と判断された經典は将来にわたって伝えてはならないとされ、一種の禁書目録となったように、経録には保護と排除の両面があり、経蔵に入れるべき經典と経蔵にいれてはならぬ經典が判別されてきました。

(4) 漢訳大蔵経成立の端緒―後漢・東晋・南北朝―前秦・道安(三一―三三五)
による「經典目録」の始めと、南朝・梁の僧祐の『出三蔵記集』

後漢から南北朝まで、この時代にたくさんの方の翻訳者が活躍します。中で最も著名な人を一人挙げれば、それは鳩摩羅什だと思えます。鳩摩羅什は四世紀の半ばから五世紀の始めにかけての人で、当時は、南は漢族の東晋、北は五胡(匈奴・羯・鮮卑・氐・羌)による十六国時代という分裂割拠の時代に当ります。クチャ(亀茲)出身の鳩摩羅什が、チベット系民族の氏族・羌族によって樹立された前秦・後秦の都・長安にとどまって、皇帝による手厚い待遇と保護を受け、翻訳道場に僧俗の優秀な人材が集められ、その後の中国仏教の骨格をなす経・律・論・賢聖集伝に亘る仏教典籍(梁・僧祐『出三蔵記集』目録部分では35部294卷、唐・智昇『開元釈教録』では74部384卷)の翻訳・講義と、三千人とも称される門下生を指導したと伝えられています。しかし唐・玄奘以前の最

も偉大な訳経僧鳩摩羅什が翻訳した総数についても、たとえば『出三藏記集』の伝記の部分では「三十二部三百余卷」とあるように、鳩摩羅什ですら都合三説が記録されているように、定かではありません。

經典翻訳の際の翻訳者・協力者、その時と所などは具体的な記録として第一に重要ですが、時とともに失われゆくのは戦乱が続く時代であれば猶更のことであって、そうした記録の不備に気付き、最初の経録を作ったのが、五胡十六国時代・前秦国の道安でした。この道安の経録自体はいつしか失われ、その後、南朝・梁の僧祐の『出三藏記集』の中にその一部が引用されて残っています。また『出三藏記集』には、経・律・論の経録部分とともに、経・律・論三藏の翻訳の記録として、経・律・論それぞれに付されていた経序等の文章が集められていて、中国仏教史上の重要な記録となっています。

(5) 漢訳入蔵録の成立―隋の經典目錄三種

法経等撰『衆経目錄』七卷	隋・文帝	開皇一四年（五九四）
費長房撰『歴代三宝紀』一五卷	隋・文帝	開皇一七年（五九七）
彦琮撰『衆経目錄』五卷	隋・文帝	仁寿二年（六〇二）

隋（五八一〜六一八）の時代になると、これらの目錄が編纂され、特に法経が中心となった最初の『衆経目錄』（以下『法経録』と略）七卷は、隋の文帝（在位 五八一〜六〇四）の勅命を受けて作られ、その後の経録の基礎となりました。彦琮による『衆経目錄』（以下『彦琮録』と略）五卷は、経蔵にどのような經典を収納し

保存するか、言わば入蔵録としての実用の基本形を示しています。この両書の間に位置する『歴代三宝紀』は経録と史書の両面を持ちます。

『法経録』第七卷の衆経総録という総まとめのところに、目録の完成を報告する法経の上表文がありまして、当時の状況を今に伝えてくれています。時の皇帝文帝は、道・仏両教に保護を加え、特に仏教に心を寄せた皇帝として有名です。全中国が隋の皇帝のもとに統率される歴史が始まりますと、前代の北周が実施した道仏二教の廃棄政策から転換して、道教とともに、国策として仏教を非常に強く位置づける時代となり、次の煬帝の時代までそれが推進されました。都の長安には大興善寺という国立の大寺院が作られ、そこに翻経所と呼ばれる經典翻訳を専門にする道場を設置し、二十名の翻経大徳の下に經典翻訳を主務とする僧侶が集められ、在俗の官僚として翻経学士が置かれました。このように、たくさん經典が整然と組織的に翻訳される時代が現れ、法経が翻経大徳の代表者として、文帝に対し提出した目録完成を報告する上表文の冒頭には、その状況が次のように述べられています。

「大興善寺翻経衆沙門法経等、敬んで皇帝大檀越に白す。去る五月十日、太常卿牛弘、勅を奉じていえらく、須らく衆経目録を撰すべしと。経等、謹んで即ち修撰す。総べて衆経を計うるに合せて二千二百五十七部五千三百一十卷あり、凡そ七卷と為す。別録は六卷、總録一卷なり。繕写始めて竟り、謹んで用て進呈す。」

続いて漢魏・西晋時代の概略を述べた後、東晋代に入り華北・五胡時代の前秦後秦と合わせて「経律粗備わ」と称して、『論語』衛靈公篇の「人能く道を弘む」にもとづき、孔子が弘める人としての道を仏教にひき寄

せて、「法は人に仮りて弘まり、賢明のひと日々に広し」と言い、儒教的な中国固有の言葉を仏教的な言葉に置き換えて賞賛しています。なかでも前秦道安の翻訳經典の研究と整理と經典目録の創案を特筆し、それより開皇一四年の今に至るまでの二百年間に、十数家の経録製作者が現れる中、梁の僧祐の『出三藏記集』を近來観るべき著作として認めつつも、『出三藏記集』以外の経録は勿論、『出三藏記集』にも経録としての編成の未整備が認められると言っています。その上で南北朝末の「三国」の時代を経た現在、前代の仏教典籍の全てを見て異同を調べるのがかなわぬ以上、今は唯、しばらく「諸家の目録」に拠って大綱を示すとして、全体を大・小乗、経・律・論の六録とそれ以外の三録の、会わせて九録に分類し、六録それぞれを一訳・異訳・失訳・別生・疑惑・偽妄の六つに分け、経・律・論以外の論著に対しては西域・此方の二つに分類しています。こうして経録のいわば基本がここに提示されました。ここに言う一訳・異訳・失訳とは、つまり、經典を翻訳した人が単数の場合、複数である場合、分からない場合、別生とは特定の複数巻の經典から一部が抜き出されて独立に用いられた經典、そして疑惑、偽妄とは、疑わしいものは将来にわたって真偽を確かめよ、偽妄のものは書写と普及を許さず、存続を許さないという禁書目録です。ここにも、当時の王朝国家の意思が働いているのです。

費長房の『歴代三寶紀』（以下『三寶紀』と略）は、『法経録』に続いて開皇一七年（五九七）に著されました。『三寶紀』全一五巻は、釈尊誕生から隋・開皇一七年までを扱う佛教史年表である「帝年」三巻、後漢から開皇一七年までの仏典の翻訳・著述の跡を朝代毎に編年史としてまとめた「代録」九巻、大・小乗の「入藏録」二巻、総目録一巻によって構成されており、隋代に至る中国王朝の正統は、漢族優位を主題としながら南北朝末の三国時代においては南朝梁から西魏・北周・隋と継承されるとする独特の正統史観を示して、隋・開皇時代にいたる中国仏教史をまとめています。「帝年」「代録」に続く「入藏録」は、従って隋・文帝の仏教政策を称揚し

その治世を翼賛する『三宝紀』の重要な一部としての働きを持ちます。『三宝紀』の名称は内題としての「歴代紀」に依るもので、外題には「開皇三宝録」とするようになり、仏典翻訳史を主題とする史書でありながら経録の性格を強く帯びて、「入蔵録」の名称が初めて明示されたと共に、それを一書の構成要素とし、且つ書名に「開皇」という皇帝の年号を冠したのは『三宝紀』を嚆矢とし、大蔵経の歴史の上に重要な位置を占めています。その構成は卷一三・一四をそれぞれ大・小乗入蔵目とし、また大乘録を菩薩蔵、小乗録を声聞蔵と称し、『法経録』に同じく経・律・論三蔵それぞれも修多羅・毘尼・阿毘曇と称し、三蔵各々を更に有訳・失訳に分類し記録しています。『法経録』は現有の仏典総数を短期間のうちに纏め上げ、その力量の程を示しましたが、それに続き、還俗僧にして且つ翻経衆の一員として翻経学士の身分を持つ費長房によって、隋王朝の正統性を前面に押し出す史書『三宝紀』の中に「入蔵録」と称される目録が初めて編成・上呈され、文帝の命によって天下に頒布されました。『三宝紀』の「入蔵録」は、『法経録』の大・小乗、経・律・論の六録を範囲とし、それ以外の三録、すなわち仏滅度後の抄録集・伝記録・著述録が省かれ、大・小乗経律論三蔵のみの入蔵目となっており、このことは、仏教大蔵経とは「大行菩薩国王」と称し転輪聖王になぞらえる文帝（『三宝紀』卷一二）によって保護される対象であることを明瞭に主張する意図が費長房にあったことを示しています。

『仁寿録』は、翻経大徳彦琮を首班として『法経録』の八年後、中途に『三宝紀』の成立を挟んで、仁寿二年（六〇二）に、これら先行二書を継承して専ら入蔵録として編纂されました。その序によれば、所轄の部局を通じて大興善寺の翻経衆である翻経大徳・沙門・学士等に、現有仏典を調査し「経録」を定めるべく勅命が下されたとあり、その編纂原則はインド伝来の梵本から翻訳されたものを書写すべき仏典として記録し、厳密に入蔵・不入蔵を規定する目録とするものでした。

『法經錄』『仁壽錄』は目録として、『三宝紀』は史書として編纂されたのですが、現在の書名上に勅撰の表示はなされていないものの、実質上は完成・上呈後、共に勅撰の扱いを受けており、大藏經として入蔵された仏教典籍の社会的地位は一層の向上をみせたものと思われ、また中国再統一後間もない隋・文帝の時期において初めて、僅か八年の間にこうした三部の経録・史書の編纂が推進されました。

大藏經編纂の歴史において隋朝はこのように重要な位置を占めますが、また經典保存の上においても大きく寄与しています。唐初期に護法活動を精力的に行なった法琳の『弁正論』には、南北朝時代から、隋を経て唐の高祖及び太宗の貞觀六年（六三二）までの皇帝と諸王臣下による一切經書写の記録が残されていますが、しかしこれらの中、北周武帝の当時まで北朝領域に保存されていたその殆どは、その領域内に実施された仏教廢棄政策によって失われてしまい、次いで南朝領域の梁陳交代及び隋による陳征服の際に甚大な被害を受けました。次の隋の文帝・煬帝による仏典修復の事業について、同じく『弁正論』には次のように記されています。

文帝 凡そ經論およ四十六藏一十三万二千八十六卷を写し、故經三千八百五十三部を修治す。

煬帝 陳を平らげしの後、揚州において、故經を裝補し、并せて新本を写すこと、合すべて六百一十二藏・二万九千一百七十三部・九十万三千五百八十卷。

こうした大規模な仏教經典に対する保護事業が推進されるかたわら、他面では偽經典廢棄政策が実施されていた実態があったことを知る史料があります。唐・道宣の最初期の著書であり且つ律学の名著『四分律刪繁補闕行持鈔』（貞觀三年（六二九）四年（六三〇）初稿）の冒頭・卷上一の第一〇に「世中の偽説を明らかにす」とし

て『諸仏下生經』以下『提謂經』までの二六部の經論を挙げて

是くの如き等の人造の經論、総て五百四十余卷あり。代代に漸出す。文義淺局にして、多くは世情に附く。隋朝久しく已に焚除するも、愚叢猶お自ずから濫用す。

と焼却の対象となつたことを述べ、さらに晩年の麟徳元年（六六四）に著した『大唐内典録』卷一〇・歷代所出疑偽經論録の末尾にも

右、諸々の偽經論は、人間の經藏に往往にして之れあり。其の本尚お多し。更に録せられんことを待つ。

と、廃棄の対象となつてなお民間に流布している実態を記していて、これもまた大藏經編成史上の一事実であると思われます。

(6) 漢訳大藏經の確立―唐時代

『大唐東京大敬愛寺一切經論目』（大正藏『衆經目錄』）

五卷 靜泰撰

高宗・龍朔三年

（六六三）成立

『大唐内典録』

十卷 道宣撰

高宗・麟徳元年（龍朔四年）

（六六四）成立

『大周刊定衆経目録』	十五卷	明佺等撰	武則天・天冊萬歲元年	(六九五)	成立
『開元釈教録』	二十卷	智昇撰	玄宗・開元十八年	(七三〇)	成立
『貞元新定釈教目録』	三十卷	円照撰	徳宗・貞元十六年	(八〇〇)	成立

西暦六一八年に隋に替わり唐が建国されますと、以上のような経録が編纂され、今に伝えられています。先ず静衆の経録は、一寺院の現在書目録であるためか、入蔵典籍の巻数の下に紙数を記して実用化が図られています。続く『大唐内典録』『大周刊定衆経目録』『開元釈教録』『貞元新定釈教目録』、この四つは重要な意義を持っています。『大唐内典録』の編者道宣は、南山律宗の始祖であり、その学問の主体である戒律学関連の多くの著書のほかに、歴史や仏教思想に関する編著書も多数あり、『続高僧伝』もその一つです。『大唐内典録』では『三宝紀』にならって「代録」と「入蔵録」を設けて、唐代の経録の先鞭をなしました。

『大周刊定衆経目録』、これは則天武后が唐の帝位を奪い周の皇帝として即位した時に作られた経録です。則天武后は仏教を非常に高く評価し、即位時にも利用しました。そして史上最善の経録とされているのが『開元釈教録』です。玄宗の開元十八年(七三〇)成立のこの経録によって、すべての経律論三蔵と賢聖集伝合わせて五千四十八巻という総数が定まり、この数字がその後の漢訳大蔵経の基本をなしました。次の『貞元録』は『開元録』の入蔵録によりながら、『開元録』の続編の形を取りつつ、新来の密教関係の文献が数多く記録されています。

以上のなかで、これまでにない内容を持つ経録『大唐内典録』が作られました。これは道宣が住持する長安・西明寺所蔵の經典類を基本に編纂されましたが、巻八の入蔵録には各仏典の巻数だけでなく、經典ごとの必要

紙数と、十巻一帙とした帙数、及び配架の順序まで記載されていて、実用上の便宜が図られています。更に道宣は「歴代衆経挙要転読録」（巻九）を編んで、読経の実用に備え、また「歴代衆経応感興慶録」（巻十）では、経典を読誦することによって得られる奇瑞・感応の実例を示しました。道宣は、『集神州三宝感通録』三卷（『大正藏』巻五二）や『律相感通伝』（同上・巻四五）を編纂しているように、感応の事例を非常に重要視した人です。経録にこういった具体的な項目が挙げられる例は他になく、实用経録としての『大唐内典録』の一面を今に伝えるものと思われれます。

（7）『歴代三宝紀』に対する日本・中国での評価

最後に、『歴代三宝紀』に対する日本・中国での評価の正負両面について、若干御紹介して終わりたいと思います。先ず日本での評価は、これまで経録研究の分野において、とりわけ極端に低いものでした。それは例えば、小野玄妙『仏書解説大辞典 別巻 仏典総論』（一九三六年）や、林家友次郎『経録研究 前篇』（一九四一年）、『異譯経類の研究』（一九四五年）等では、著者費長房の翻訳者の選定のあり方等について、極めて杜撰であり後世へ悪影響を及ぼしていると、強い口調で批判します。一方、常盤大定『後漢より宋齊に至る訳経総録』（一九三八年）では比較的に中庸な表現で批判しますが、凡そ経録を用いる研究では、これまでも『歴代三宝紀』に対しては批判的な論調が多かったと思います。この一方、現代中国の中国宗教史研究の分野で最も優れた成果を挙げた人物に陳垣（一八七九～一九七二）がいますが、彼は『中国仏教史籍概論』（一九四八年）巻一に梁・僧祐の『出三藏記集』に続いて『歴代三宝紀』を取り上げ、その「本書之特色」の項で、その史書としての記述

に高い評価を与え賞賛しています。なお二〇一四年になって、京都大学の西脇常記・村田みお両氏によって『中国仏教史籍概論』の平易な現代語訳（和泉書館刊）がなされましたので、ご参照頂けたらと思います。

『歴代三宝紀』の記録の価値というものは、経典目録としてだけではなく、歴史記録としても非常に意義のある史料であるということを含めてお伝えし、時間なので終わりたいと思います。ありがとうございました。

参考・京都仏教各宗学校連合会編『新編 大藏經―成立と変遷―』第Ⅱ部第2章 経典目録の編纂と漢訳大藏經 二〇二〇年
法藏館